

モーセの生涯(5)

2008.11.11(火)
ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

出エジプト記 3章10節から12節

「今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」モーセは神に申し上げた。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行き、イスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。」神は仰せられた。「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。」

出エジプト記 4章1節から9節

モーセは答えて申し上げた。「ですが、彼らは私を信ぜず、また私の声に耳を傾けないでしょう。『主はあなたに現われなかった。』と言うでしょうから。」主は彼に仰せられた。「あなたの手にあるそれは何か。」彼は答えた。「杖です。」すると仰せられた。「それを地に投げよ。」彼がそれを地に投げると、杖は蛇になった。モーセはそれから身を引いた。主はまた、モーセに仰せられた。「手を伸ばして、その尾をつかめ。」彼が手を伸ばしてそれを握ったとき、それは手の中で杖になった。「これは、彼らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主があなたに現われたことを、彼らが信じるためである。」主はなおまた、彼に仰せられた。「手をふところに入れよ。」彼は手をふところに入れた。そして、出した。なんと、彼の手は、らいに冒されて雪のようであった。また、主は仰せられた。「あなたの手をもう一度ふところに入れよ。」そこで彼はもう一度手をふところに入れた。そして、ふところから出した。なんと、それは再び彼の肉のようになっていた。「たとい彼らがあなたを信ぜず、また初めのしるしの声に聞き従わなくても、後のしるしの声は信じるであろう。もしも彼らがこの二つのしるしをも信ぜず、あなたの声にも聞き従わないなら、ナイルから水を汲んで、それをかわいた土に注がなければならない。あなたがナイルから汲んだその水は、かわいた土の上で血となる。」

コリント人への手紙・第二 2章15節、16節

私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかくわしいキリストのかおりなのです。ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。このような務めにふさわしい者は、いったい誰でしょう。

コリント人への手紙・第二 3章 5節

何事を自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというではありません。
私たちの資格は神からのものです。

コリント人への手紙・第二 4章 7節

私たちは、この宝を、土の器の中に入れていたのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちがから出たものでないことが明らかにされるためです。

皆さん、40日の間、私たちのことを覚えて祈ってくださったことを本当に感謝します。

今朝、カナダのG姉妹から電話がありましたので祈ってください。非常に元気な声でした。けれども弁護士からの手紙によると、ご主人は強く離婚を希望している様子です。しかし、彼女は悩みながらも喜んでる姉妹です。不安、心配から解放されている姉妹で、生きる希望をもって前向きに生活することができる姉妹です。ご主人は彼女のことを徹底的に憎んでいるようです。なぜか、彼は毎日犬の散歩ということで、子どもの顔を見るために姿を見せるそうです。彼女のことをぜひ覚えていてください。置かれている環境を大切にしないで、十字架の上で犠牲になり、代わりに死なれ、復活なさったイエス様を仰ぎ、イエス様を見上げ続けることができるように、ぜひ祈ってください。G姉妹です。

先に読みました二箇所は、モーセと、少しだけパウロについても書かれている箇所です。この学びの初めから言いましたように、このモーセはイエス様のひな型であると言えます。モーセがイスラエルの民を死の苦しみエジプトから導き出し、蜜と乳のしたたるカナンの地に導き入れたのと同じように、イエス様は私たちを悪魔の支配の中から救い出し、ご自分の御国へ引き上げてくださいました。

パウロは、

コロサイ人への手紙 1章 13節

神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

過去形です。「移すであろう」ではありません。もうすでに御子のご支配の中に移されていると。

今の時代にイエス様が心に願っておられることは、あらゆる国民の中からご自分につく民を選び出し、それらの人々がイエス様の満たしにまで成長することです。

主はモーセに、「わたしは必ずあなたとともにいる」と約束してくださいました。また、主はモーセに、「見よ。わたしはあなたをパロに対して神のごときものとする」と言われた

のです。主は親しくモーセに臨在なさいました。モーセがパロに会うとき、パロはモーセのうちに全能なる神を見ずにはおれないくらい親しくご臨在なされたのです。

しかしなぜ、神はそんなに親しくモーセに結びつかれたのでしょうか。それは、モーセが主のみこころの真中を歩んだからです。自分の思いではなく、みこころだけがなるようにと望んだからです。私たちもモーセと同じように主の約束を信じ従うなら、主は私たちに親しく臨在してくださいます。主がご自分のみこころを私たちに示して下さり、私たちがそのみこころに沿って歩むなら、私たちも、モーセと同じように主を体験することができるはずです。モーセは主のみこころだけを行なっていましたから、モーセの責任は全部主がとってくださいました。

主はなぜモーセに、「わたしは必ずあなたとともにいる」と約束なされたのでしょうか。それは今話したように、モーセは己を主に全くささげ、ただ主のみこころだけを行なおうと望んだからです。

前に話しましたが、主がモーセと全く一つになる前に、モーセはまず空の器となり、裸とならなければならなかったのです。モーセの生活の中には、自分を思う心、自らの力に頼る傾向が非常にたくさんありました。けれど、主はこのモーセをお導きになり、モーセは「自分は駄目な人間である」ということを知るときがおとずれたのです。

むなしくなったモーセは、あるとき全能なる神、よみがえりの神、きよめの神に出会い、一つになり、前とは全く変わって權威ある者と変えられました。モーセが救い出され、選ばれたのは、自分の力ではなく全能なる主のなされたみわざであることをモーセ自身よく知っていましたが、準備を固めてこれからパロのところへ行こうとするとき、話すことの上手でないモーセにすべての準備を整えさせてくださったのも、全能なる神のなされたみわざには他ならないことを、心の深くに感じていました。

モーセは、イスラエルの民を救い出すために、主からいろいろな準備を示されました。これは全く主から与えられたものでした。エジプトの王子として、モーセはあらゆる学問を積み、言葉にも技にも力がありました。この世の教育、自らの力は何の役にも立たないことを彼は知りました。それは「上からの權威と力」だったのです。

しかし、モーセが不安に思ったことが三つありました。
* 第一番目。「私には名前がない。肩書きがない。權威がない。地位がない」と自分に何も力のないことを不安に思ったのです。

今読みました箇所にもう一度戻りましょう。出エジプト記3章10節を見ると、わかります。

出エジプト記 3章10節から12節

「今、行け。わたしはあなたをパロのもとに遣わそう。わたしの民イスラエル人をエジプトから連れ出せ。」モーセは神に申し上げた。「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行きイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。」神

は仰せられた。「わたしはあなたとともにいる。これがあなたのためのしるしである。わたしがあなたを遣わすのだ。あなたが民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で、神に仕えなければならない。」

と記されています。モーセは自分の不安を主に訴えました。

* 第二番目。モーセが不安に思ったことは、イスラエルの民がモーセを解放者として認めないのではないかということです。

出エジプト記 4章1節

モーセは答えて申し上げた。「ですが、彼らは私を信ぜず、また私の声に耳を傾けないでしょう。『主はあなたに現われなかった。』と言うでしょうから。」

このように、モーセは主に自分の不安を打ち明けています。

* 第三番目。モーセが不安に思ったことは、自分が話せないということです。

モーセはミデヤンの地で過ごした四十年の間、自分の国の言葉をあまり話さなかつたでしょう。ある言葉はもう忘れてしまったのではないのでしょうか。

出エジプト記 4章10節

モーセは主に申し上げた。「ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」

このようにモーセは自分の不安を主に訴えたのです。主がモーセに、「エジプトの王パロのところに行き、イスラエルの民を解放しなさい」とお語りになったのに、モーセは、「主よ。何かの間違いではありませんか。見当違いです。私には何の力も能力もありません。私はできません」と尻込みしています。

私たちも同じような経験を持っているのではないのでしょうか。心の中に二つの思いがいつも相逆らって働いています。一面では「私はこの仕事をする器ではない。私ではできない」という気持ちがあり、もう一面では「主が与えてくださった、しなくてはならない仕事だ。これは自分の責任だ」と思う心があります。このように主が導いてくださっているのは、感謝です。しかし、それとは反対に、「自分是可以する。主の奉仕をするに足る器だ」と自ら高ぶる者は災いです。そのような人の心には、「謙遜」がなく、主の前に砕かれて主を礼拝する心が決して湧いてこないから災いです。

しかし、モーセは、エジプトの学問を積んだ素晴らしい教養のある人ではなかつたでしょうか。パウロについても、全く同じことが言えます。パウロはガマリエルの門下で学び、当時のユダヤでは最高の教育、学問を積んだ学者だったのではないのでしょうか。パウロ自身

に聞いてみましょう。前に読みましたコリント第二の手紙2章15、16節です。

コリント人への手紙・第二 2章15節、16節

私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかくわしいキリストのかおりなのです。ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。このような務めにふさわしい者は、いったい誰でしょう。

パウロは、自分自身のうちに何も力のないことをよく知っていたのです。

コリント人への手紙・第二 3章5節

何事かを自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというわけではありません。私たちの資格は神からのものです。

私たちには自らのうちに何の力もありません。もし私たちの心の目が開かれて、主に対するご奉仕がどんなものであるかわかったなら、私たちが持っているどんな素晴らしい力も、それが自ら出る力ならご奉仕には何の役にも立たないことがわかるはずです。

私たちは、いったいどうしたら主のしもべになることができるのでしょうか。苦しみや失敗を通して、自分がいかに力なきものであるか深く認めることによって、初めて主のしもべとなることができます。このように打ち砕かれたときに、主は、欠けだらけの、失敗だらけの器を通して、ご自分の働きをなさるのです。

モーセに、逆に主は訊ねられたのです。もう一度出エジプト記に戻りまして、出エジプト記 4章11節

「だれが人に口をつけたのか。だれがおしにしたり、耳しいにしたり、あるいは、目をあけたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、主ではないか。」

主なる神は、私たちがどのようにして造られているか、私たちが何者であるか、一番よくご存じです。主は、私たちを、ご自分のみこころのままにお造りになります。私たちが自分であることなく、主ご自身が私たちのうちに、また私たちを通してみわざをなされることにより、すべての栄光がご自身に帰せられるように主はなさいます。主は、見栄えのない荒野の柴を取り出され、それに神の火をつけられます。

パウロも言っています。前に読んだ箇所です。

コリント人への手紙・第二 4章7節

私たちは、この宝を、土の器の中に入れていいます。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

パウロは、「自分はただの器に過ぎない。主が私たちを通して外に現われ給うその器

に過ぎない」と告白しています。私たちも、モーセやパウロと同じように、主の導きのままたまに歩む用意があるのでしょうか。

私たちの肉は、自らむなくすることを喜びません。私たちが打ちのめされ、失望したときに最も近く主はご臨在し、私たちがむなくなるとき、自分で働くことをやめたとき初めて主がお働きになり、空っぽになったとき初めて主のご栄光が私たちを通して現わされる、ということ信じようとしません。

「わたしは必ずあなたとともにいる」。これは主がモーセに与えられた約束です。モーセが行き詰まったとき、主は現われてくださいました。しかし、モーセが自分ではできると思っていたときには、主は何もなさいませんでした。モーセがむなくなるとき、いつも主のご臨在が鮮やかに示されたのです。「だれが人に口を授けたのか。主なる神わたしではないか。わたしはいつも変わりなく造り主である。わたしはおまえの口をわたしの思うままに使うのだ」と主は仰せになっています。

主によって用いられたエレミヤも主に、言いました。「ああ主なる神よ。私はまだ若者に過ぎず、どのように語ってよいかわかりません」。これに対して主は、エレミヤの口に手をのべ、「見よ。わたしのことばをあなたの口に入れた」と言われました。

「私の性格はこうだからこのご奉仕には向かない。私はそのために造られていない」などという言いわけは、主の前には通用しません。主は、私たちが元々どのような材料で造られているかよくご存じです。私たちはいついかなる場合にも、身をもって主の栄光を現わすように造られているのです。「わたしは必ずあなたとともにいる」。これは主の約束です。

一つの質問について考えたいと思います。主はどのようにしてモーセと一緒におられたのでしょうか。答えは三つです。主は、

第一番目。悪魔に対する武器として、臨在なさり、

第二番目。罪を防ぐ武器として、臨在なさり、

第三番目。この世に立ち向かう武器として、臨在なさったのです。

* 第一番目。主は「悪魔に対する武器」として、ご臨在なさいました。

「モーセよ。あなたの手にあるそれは何か」。杖です。「それを地に投げなさい」。モーセが神に言われたように杖を地に投げると、その杖は毒蛇となったので、モーセはその前から身を避けたのです。モーセがそれからその蛇の尾をつかみますと、それはまた神の杖に変わりました。この神の杖により、主はモーセを通してエジプト人に裁きを与えられました。その杖により、イスラエルの民はアマレク人を打ち破ることができたのです。

出エジプト記 4章 5節

「これは、彼らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主があなたに現われたことを、彼らが信じるためである。」

このようにして、主はモーセにご臨在を現わされました。けれど、これはいったい何を意味しているのでしょうか。モーセの前に現われた毒蛇には、どういう意味があるのでしょうか。

モーセは蛇を見たとき、その前から身を避けました。逃げました。蛇は私たちにとっては、反対するもの、敵、苦しみ、災い、迫害などを意味しています。これらのものが襲ってくる時、私たちもモーセと同じように、その前から身を避けるのは当然なのではないでしょうか。

しかし、モーセが蛇の尾をつかんだ時、それは再び神の杖となりました。「わたしは必ずあなたとともにいる」。この神のご臨在は、災いを幸いに变えます。悪魔がどんなに私たちを責めても、苦しめても、それも主の御手のうちにあり、ご計画のうちにあります。悪魔は主なる神の道具に過ぎません。主が臨在してくださるなら、悪魔が私たちを滅ぼそうとして設けた罠も、主のご計画を助ける道具となります。

パウロの場合にも同じことが起こったのです。パウロは悪魔の働きにより捕らわれの身となりましたが、パウロが捕らわれたことにより、福音は結局著しく前進したとあります。刑務所の中でパウロは書いたのです。ピリピ人への手紙1章。新約聖書になります。ピリピ人への手紙 1章 12節から 14節

さて、兄弟たち。私に身が起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。私がキリストのゆえに投獄されている、という事は、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあつて確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました。

悪魔はあらゆる手段をもってパウロを攻撃しましたが、主のご臨在が絶えずパウロの上にはありましたので、サタンからの迫害、苦しみ、誤解、それらはみな福音の前進に役立つだけでした。決してパウロを痛めつけることにはなりませんでした。

「わたしは必ずあなたとともにいる」というモーセに対する主のご臨在の約束は、実際的には悪魔の全力に対抗し得る力を持っているという約束に他なりません。

今話しましたように、パウロの場合も全く同じでした。私たちの場合も同じです。もし、主が実際に私たちに臨在してくださるなら、私たちは主のみこころを知り、主にすべてをおさげしているはずですが、悪魔は毒蛇のように荒れ狂っています。けれど、主のご臨在を身に覚えるなら、私たちは毒蛇の尾をつかんでおり、この毒蛇は主のご計画を成就する道具に過ぎないということを知るはずですが。

どこへ行っても悪魔は生きており、勝ちを占めるかのように思えます。しかし、私たちはこのサタンに対しいかなる態度をとるのでしょうか、不安になってあせるのでしょうか。

それとも一番高いところに主のご支配があり、悪魔の働きも主のご計画の中に入っていることを悟るのでしょうか。

もし、私たちが主のご臨在を信じているなら、悪魔の働きは主のご計画を実現する手立てにすぎないことを知ります。ローマ書 8 章に同じ真理が書かれています。皆さんが暗記しているみことばです。

ローマ人への手紙 8 章 28 節

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益とさせていただきますことを、私たちは知っています。

原語を見ると、「知っています」ではなくて、「確信する」となっているのです。初代教会の確信とは、「すべて」ということです。すべてはすべてです。「すべてのことが働いて益となる」と。

もし、私たちが、ひとり子なるイエス様にいいなづけにされた花嫁である神の教会を心の目で見ると、いかなる悪魔の働きもそれは主のご計画を成就する一つの役割を演じているにすぎないことがよくわかるはずです。すべてのことが相働いて益となることを知るようになります。

毒蛇は神の杖となり、神のご計画を実現する道具となりました。このようにして、主は、モーセをご自身の臨在をもって助けられました。

私たちにも、主がヨシュアに言われた次のことばが当てはまるのではないのでしょうか。ヨシュア記の 1 章。(これも本当に素晴らしいみことばです。) ヨシュアに与えられた約束ですが、この約束は私たちにも自由に与えられていると信じることができます。

ヨシュア記 1 章 5 節後半

「わたしは、モーセとともにいたように、あなたとともにいよう。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」

モーセとともに歩み給うたその同じ主は、私たちとともに歩んでくださると言われます。それを信じ、感謝致しましょう。「もし信じるなら、神の栄光を見る」と約束されています。主のご臨在を信じ、感謝すべきではないのでしょうか。「わたしは必ずあなたとともにいる」と、嘘を知らない主が約束しておられるのです。

主は、どのようにしてモーセといっしょにおられたのでしょうか。主は悪魔に対する武器として臨在してくださいました。

* 第二番目。主は罪を防ぐ武器として、臨在なさったのです。

主なる神はモーセに、「あなたの手をふところに入れなさい」と言われました。彼が手をふところに入れるとどうでしょう。手はらい病にかかって雪のように白くなってしまったのです。

らい病は恐ろしい病気です。誰もが不安と恐れを感じます。聖書を読んでいますと、らい病は「のろい」の病とされています。らい病人はいつも他の人と区別されています。町を通るときには、「私は汚れている。私は汚い者です」と叫んで歩かなければならなかったのです。

らい病は、聖書によれば「罪」を象徴しています。罪はらい病と同じように人を孤独にし、汚れさせ、のろいのもとに引き入れてしまいます。らい病は人の心の罪と汚れを象徴しています。また、らい病は不治の病とされていますが、どうしても癒すことのできない憐れな人の心を象徴しています。

次に、主は再びモーセに、「手をふところに戻しなさい」と言われました。モーセは手をふところに戻し、それを出してみると元通りになっていて、もとの肉のようになっていたと聖書に書いてあります。これは何を意味しているのでしょうか。手は、奉仕を象徴しています。神はこの事柄を通してモーセに、「お前の生まれながらの性質は、わたしの奉仕に何の役にも立たない」と教えられたのです。

らい病人は、罪と咎によって死んでしまっている古き人を表わしています。らい病人は、親戚や肉親や友だちにとってははいないも同然です。らい病人は死人と同じ扱いを受けていました。モーセはこの経験により、自分はまったく何もできない無能力な者である。しかし、この無能力の者に主が臨在してくださるとき、この者を通して、主はすべてのことを成したもうということを、深く悟ったに違いありません。

主のご臨在により、悪魔の力はどこかへ追いやられ、罪の力は断ち切られました。私たちは罪をもっては主に仕えることができません。自分の力をもってしては、満足なご奉仕ができないことをよく知っています。けれど、もし主が臨在してくださるなら、私たちの欠点は拭い去られるということも知っているのでしょうか。

私たちは本質的に汚れた罪人です。罪によってらい病人のように汚れていますが、主はこのように汚れた者に新しい立場を与えてくださいました。もしこの立場に固く立つなら、主は私たちを通して働きになります。もしこれをはっきりさせていないなら、心の中は混乱してしまいます。私たちは主のご臨在に出会い、罪を赦され、神の子とされましたが、救われるときだけではありません。続いて主のためにご奉仕するときも、この神のご臨在はどうしても必要です。

悪魔は私たちを神のご臨在から離そうと試みます。私たちの目を自分の心に向けさせています。「おまえは駄目な者だ。罪を犯し、失敗だらけだ。お前の心を見よう。そこから出てくる思いは何か」。そのように言って、私たちを失望させます。このようにして悪魔は私たちの喜びと権利を奪い取ってしまいます。そして、悪魔の支配する罪の世界から人々を神の国に導き出し、キリストの満たしに至らせるという私たちの使命をばやかしてしまいます。

パウロは、これらの悪魔の策略に固く立ち向かった男でした。「もし、神が私たちの味方であられるなら、誰が私たちに敵しようか」と彼は告白したのです。

主なる神はモーセにも、「わたしは必ずあなたとともにいる」と臨在を約束され、悪魔に勝たせ給いましたが、モーセに臨在なされた主は、どのようにして私たちに臨在しておられるのでしょうか。

御子主イエス様により、父なる神は私たちに臨在しておられます。主なる神ご自身が臨在して下さるなら、私たちは罪のために訴えられることはもはやありません。もし、主なる神が臨在して下さるなら、天の軍勢とともに臨在して下さいます。ですから、生まれつきの小さな人間の力などは全く問題でなくなります。

モーセは、主のご臨在を求めました。ですから、数々の奇跡を経験することができたのです。主は、私たちとともにおられます。イエス様の別の名は、「インマヌエル」という名です。これは、「神我らとともにいます」という意味です。ご臨在の主イエス様は、私たちのあらゆる罪を、また問題を解決して下さいます。また、生まれながらの性質もご臨在をもって覆われるとき、主の香りに包まれてしまうのです。主のご臨在は私たちの喜びです。また、主のご臨在を保ち続け、主の栄光を現わし続けていくことは、私たちの責任でもあります。「わたしは必ずあなたとともにいる」。これは主の約束です。

主は、どのようにしてモーセといっしょにおられたか。主は悪魔に対する武器として臨在なさり、罪を防ぐ武器として臨在なさり、

* 第三番目。主はこの世に立ち向かう武器として、臨在なされたのです。

もう一度、出エジプト記4章に戻りまして、
出エジプト記 4章9節

「もしも彼らがこの二つのしるしをも信ぜず、あなたの声にも聞き従わないなら、ナイルから水を汲んで、それをかわいた土に注がなければならない。あなたがナイルから汲んだその水は、かわいた土の上で血となる。」

と記されています。主のご臨在は、この世に勝たせる力です。この世は確かに大きな力を持っています。ヨハネ第一の手紙5章19節を読むと書かれています。すなわち、
ヨハネの手紙・第一 5章19節後半

全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。

全世界は悪い者の支配下にあり、この世の君である悪魔はこの世を通して働いています。この世は主の目的を妨げる手立てです。パウロは、「私はこの世に対して十字架につけられた。この世は私に対して死んだものである」と言いました。パウロが言った「この世」とは、いったい何を意味しているのでしょうか。それは、自分の名前、名誉、地位などです。もし、このようなものに追い回され、導かれているなら、神のご目的を達成することは

きず、この世に打ち勝つ力も決して湧いてきません。

モーセが主に従い、ナイル川の水をとって地に注ぎますと、それは血潮に変わったのです。これは、この世に対する裁きを意味しています。モーセは、この世に勝つ力を知っていました。血潮こそ、この世に勝たせる勝利の力であることを知っていたのです。私たちのうちになされていく主のみこころは大切です。私たちがイエス様のために何を成すかではなく、主ご自身が私たちのうちに何をなさるのが問題です。主なる神の奉仕にはしもべが必要です。このためには、荒野で苦しみ、悩み、空っぽにならなければいけません。心のエジプトが取り去られ、主に私たちが親しくお交わりいただけるように整えられなければなりません。

モーセの使命は、イスラエルの民をエジプトから導き出すことだけではなかったのです。導き出した民を引き連れて荒野の中を前進するのも、モーセの使命でした。私たちも人々が信者になるだけで満足せず、それらの人々が成長することを祈り求めなければなりません。

エペソ書の4章を見るとわかります。パウロはもちろん、救われた人々のためにずっと祈り、戦い続けました。

エペソ人への手紙 4章 12節から 14節前半

それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。それは、私たちがもはや、子どもではなくて、...

と書かれています。これを読むと、神のみこころが明らかに示されています。この主のご目的が私たちの目指すところとならなければいけません。もしこれに気づくなら、教会が何であるかもわかるでしょう。しかし、もしそうなるなら、それまでにないほど悪魔の攻撃を身近に感じるようになります。けれど、主ご自身のご臨在は悪魔に立ち向かう武器です。主のご臨在は、悪魔の権威を滅ぼします。主のご臨在は、罪の力を砕きます。主のご臨在によって、この世は十字架につけられます。「わたしは必ずあなたとともにいる」と、主はモーセに約束されました。

どのようなとき、主は私たちとともにおられるのでしょうか。

私たちが主のご目的に目をとめ、主のご栄光のために尽くすとき、モーセと同じように、「わたしは必ずあなたとともにいる」という主のみことばが自分のものとなるのです。

イエス様はかつて、「わたしはわたしの教会を建てよう」と言われましたが、この主のご目的を目の前に見ているのでしょうか。もし、私たちがモーセと同じ主のご臨在を自分のものとしたら、このことが必要です。そして、もし主が私たちに臨在してくださるなら、

わたくし てき う もの ひとり あくま つみ よ わたくし
ら、私 たちに敵し得る者は一人もいなくなります。悪魔も、罪も、この世も、私 たちに
ふ 触れることができません。

しゅ まった みずか ゆだ しゅ かなら
モーセは主に全く自らを委ねましたから、主はモーセに、「わたしは必ずあなたとともに
やくそく
にいる」と約束されました。イスラエル人はしばしばエジプトに帰ろうとしましたが、モ
ーセは決してエジプトへ帰ろうなどとは思いませんでした。モーセは いっしゅん
に帰ろうなどとは思いませんでした。モーセは しゅ まった
主に全てをささげました。ですから、主は
しゅ
モーセを「わがしもべモーセ」と言われたのです。モーセは しゅ みずか まった
主に自らを全くささげました
ので、主は しゅ
モーセに親しく臨在されました。

しゅ きょう わたくし よ まえ よ き しょう せつ
主は、今日も私 たちに呼びかけておられます。前に読みましたヨシュア記 1 章 5、6 節。
ヨシュア記 1 章 5 節後半、6 節前半

「わたしは、モーセとともにいたように、あなたとともにいよう。わたしはあなたを
み
はな
放さず、あなたを見捨てない。強くあれ。雄々しくあれ。」

やくそく にぎ しんこう も さら ぜんしん い
この約束をしっかりと握り、信仰を持って、更に前進して行きましょう。

しよ しょう ないようてき おな いちど よ
ヘブル書 1 3 章、内容的には同じですが、もう一度読みます。

びと て がみ しょう せつこうはん せつ
ヘブル人への手紙 1 3 章 5 節後半、6 節

しゅ じしん い
主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを
す
捨てない。」そこで、私 たちは確信に満ちてこう言います。「主は私 の助け手です。
わたくし おそ にんげん わたくし たい なに
私 は恐れません。人間が、私 に対して何ができましょう。」

了